

---

## 絆3 ~禍束編~

佳生

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絆3 ～禍束編～

### 【Zコード】

Z6612E

### 【作者名】

佳生

### 【あらすじ】

死神と呼ばれる殺人鬼。殺人鬼に狙われる狂愛者。そんな彼等に出来上がる、血の繋がらない、『かぞく』の物語。

むしゃくしゃしていた訳じやない。

ただなんとなく、そういう事をしてみたいなあ、と思つただけで、特になんの意味もない。

むしゃくしゃしていた訳じやない。

ただ。ただ……やつてみたいと、思つただけ。

「ちよつと君！君、今、鞄に何入れたのかな？」

速攻アウト。笑顔の若い店員に捕まつてしまつた。

「ちよつと君！君、今、鞄に何入れたのかな？」

「あ、いや……すみません」

「すみませんじゃなくて。ほひ

ぐいと腕を引かれて、少しばかり抵抗したけれど、事が大きくなつては困る。

まあ、若い人だし、それなりにお金を出せば見逃してくれるだろ

うな。

と、思つて、溜め息まじりに彼についていこうと思つたら。

「ああ、すんません！ ほら、お前も。俺が外にいたんで、外に来ちゃつただけだよな、はい、お代」

知らない人が、何か、白い髪の人が僕の目の前で笑つてる。この人、なんで俺の知り合いみたいな顔してんんだろう。

コンビニから引っ張り出された俺は、その白い髪の人に手をひかれたまま、ずっと歩く。どこまで俺の手を引いていくつもりなんだか分らなかつたけれども、振りはらう気にはなれなかつた。気分的に、そんな感じだつた。

「お前さあ、やるならもつと氣合い入れてやれよ。あんなバレて当然つて取り方すんの、やめてくんね？」

なんて言いながら、俺の手は離さないこの人。そろそろ誰かに助けを求めた方がいいんだろうか。

「つうかさあ、お前何やりたかつたわけ？ あれか。魔がさしたのか？ 受験勉強大変なのか？」

「別に……受験勉強は別に問題ないっす」

勉強に関しては苦労した記憶がないから。苦労してるのは、それ以外のことです。

「はいまあよ、俺、聞いてやるから」

「いや、別にいいんで……てか、放してくださいこいつ

「「」で放したら、お前また同じ」とすんじゃねえの?」

「しないですよ

どうだろ? やっぱり気分でするかもしれない。天からのお告げがあつたりしたら、躊躇なくやると…思う。俺つて結構危ない奴だよな、なんて思ひともしづば。

そんな俺を引っ張つてるこの人は普通の人なのかどうか……つむ。頭白い当たり違つ氣がする。見た感じ若い人だし。ぶつ飛んでるつて言つんだっけか? それとも風変りな人つてことか。

「茶でも、飲んでかね? 結構俺の部屋面白こと思つんだけじなあ

「はあ」

家に帰つてもすることないし。まあ、いつかな。知らない人につ

いっていつちやダメだつて言われてるけども……まあ、いつか。

ついてきてしまった彼の家。それは、どこをどう行ってたどり着いたのか分からぬけれども、路地裏の裏ぐらいにある、死ん

だみたいな建造物群の中だった。こんなところがあったんだ、と思つ  
ようなどころ。

その中の一つに入つて、驚いた。

「はい、どうぞ」

外の閑散とした雰囲気とは真逆。新築同様の近代設備にあふれた  
一軒家になつていた。罅割れは見られないし、隙間風が入つてきて  
寒いとも思わない。しかも広いし一階もあるっぽい。

どうなつてゐるんだ、この家。

「あ？ 紅茶派だったか？」

白髪の知らない人に言われて、よつやく俺は自分の田の前に出さ  
れたコーヒーに気がついた。

「いや、マニア派つす」

「マジかよ」

笑われた。

いひひひ、と笑っている知らない人。結構格好いいのにその笑い方はないだろう。いや、なればいい味出して聞こえるんだろうか。

「じゃ、これ。ココアな。ホットミルクあるから自分で混ぜて」

「すんませんっす」

知らない人んちで何やつてんだか、俺。

「ああ、そうだ。俺、春日野 かすがや 名鷹 なたか。お前は？」

「俺は…… 莉 菅原 じすがわら 遠夜つ とおや す」

「リス？ はあん。リスな。分かつたよ、お前、今日からリスな」

今日からつて、もう会わないと思うんですがね。てか、中坊捕まえてリスはないと思います。リスつて、もう少し、かわいい女の子につけてあげるべきだよ。かわいい子つて……思ひ浮かばないけれども、とりあえず俺見たいのにつける名前、じゃない。

「……」

すする程度にココアに口をつけてみる。

どうしようか、怪しい薬とか入ってたら。いきなり眠くなつて、目  
が覚めたら、なんか機械化されてたりして。改造されてたらどうし  
よ。……あー、ちょっと、かつこいいかも。

しかも、なんか、口口アうまいし。惚れそつ。



## 02・狂愛者の同居人

なんだか分からぬけれど、今日、僕たちのルームに新しい人が来るらしい。全寮制である僕らなんだけれども、そもそもこの学校にこの時期に編入生なんて珍しい。

どんな子だろう。どんな人かな。怖い人じゃなかつたらいいんだけれど。

「……」

朝のホームルーム。編入生が来るから、久しぶりに先生が朝からやってきていた。音もなく開く扉。あれって力加減間違うと、すごいもの凄い音するんだよね。

同じ家になるんだと思ったら、急にドキドキしてきた。女の子だつたらどうしよう。部屋から出でこれないよ。

そんな事をぐるぐる考えてたら、急にクラス中に歓声が響いた。今までにない感じで。かわいい女の子だつたら男子の、かつていい男の子だつたら女子の声のはずなのに。今回は両方だつた。

恐る恐る顔を上げてみると。

「斜透字  
えん  
鳥です。よろしくお願ひします」

棒読みだった。無表情だけれども、びっくりするくらい綺麗な姿  
かたちの……たぶん、彼。制服が男子用だから、きっと男の子のは  
ず。そうじゃなかつたら、僕がびっくりするんだけれど。

伏せがちな目と、長すぎる黒の前髪。制服が似合つていいな、  
と思いながら、僕のななめ前に座つた彼の背中を見る。細い人だ。  
でも、なんだか怒つているような顔をしているから、話しかけず  
らううだな。

そう。朝会った時には、話すらそうだつて思つたんだけれど。

「そつか。君がこの家の人だつたんだ」

「僕の家つて、訳じやないんだけどね。あ、僕、代四宮よしのみや 大居いぬい。多分、もう一人帰つてきてると思つよ」

鞆から鍵を取り出して、鍵穴に差し込む。新しい家だから、なんなくロックは解除されて、玄関を開ける。

あの子が一人でいる時に限りだけれど、家に人がいても鍵がかかつていてる。用心深いというか、警戒心が強いというか。たぶん、口タと遊んでるんだろうな。それとも新聞の切り抜きでも作つてるかな。

鳶くんに驚かなきやいいんだけれど。

「ただいまー！」

僕が家の奥へ呼びかけると、正面の扉から、ちゃこちゃこと足音をさせて、僕の愛犬、口タが走ってきた。その後に続いて、同居人

の人も出てきたんだけれど、鳶くんの姿を見るなり、肩をはね上げて奥へと戻ってしまった。

「可愛いね」

そう言つてほほ笑んでくれた鳶くんだけれど、讃められた口々の方は、何が気に入らないのか、尻尾を丸めて僕をせかす。

「『めんね、何か』

「いや、いいよ。僕が知らない人だから警戒してるだけだらうじ。すぐに慣れてくれるよ」

「あは！ そうだよね！」

最初は近寄りがたい感じで、無表情だつた彼だけど、学校を出した瞬間から優しい表情になる。学校嫌いなのかな。……僕だつて、好きな訳じやないんだけれどね。

「あ、そうだ。ここ、もう一人いるんだ。……//πン～！」

出てきてくれるか微妙だけれど、一応呼んでみる。そしたら、奥の部屋の扉から、顔だけ覗かせて、何とも表わしがたい表情でこつちを見つめてきた。

「ニヨン、この人が先生が言つてた人。斜透字 薦くん」

そう、僕が名前を教えたたら、珍しく自分から人前に出てきた。学校だと普通に目立たない感じの子なんだけれど、ひとたび自分の家、というか自由にできる場所に帰つてくると、居留守を使つても人とは顔を合わせない。

「どうせ」

薦くんが笑顔で言つと、ニヨンは家着のラフな姿で小さく頭を下げた。

「あたし、つらぬし 貫思 みお 水脈。……よろしく」

小柄でも大柄でもない彼女だけれど、男性で言えば標準の僕と、そんな僕より少し身長のある薦くんの間だと小さく見える。

「挨拶も終わつたし……あ、薦くんの部屋教えてあげる。荷物とか届いてるよー。配置は言われたとおりにやつておきましたって」

「ああ、そりなんだ」

そうして僕とミヨンとロタ。三人で彼を連れて二階の個人部屋へと行く途中、彼が言った。

「そうそう、今日の夜、一人に紹介しないといけない人がいるんだ。一人と、あと一人」

「そうなの？」

ちょっと嫌そうな顔をしたミヨン。

「僕、ちょっと訳ありで。その人達にあつてから、友達になるかどうか決めた方がいいかも。あ、友達になりたくなかつたら、僕はどうとでもするから。顔は合わせないようにするとか、そんなこと程度だけど」

笑顔のままで言われても、僕の心は酷く冷える。なんだろう、そういう訳ではないのに、怖い。悪い事をしてしまったような気になる。

「大丈夫だよ、そんなこと言わないでよ」

「じめん」

そうして僕は彼の部屋の前で、鳶くんに道を譲る。この家の誰一人として、まだ彼の部屋を見たことがない。どんな部屋か気になる反面、見ていいのか悪いのか分からぬ。

「……えっと」

ドアノブに手をかけた状態で鳶くんが苦笑している。どうやら見られたくないようだ。

「『めん。見せたくない』

苦笑を返した僕と、期待するように舞っていたニコンにそう笑いかけて、彼ははつきりと拒絕した。

そうされると元から追及するたぢぢやない僕と、自分の場所を大事にするニコンは、無理に入ろうとはしなかった。口タに至つては、興味自体ないだらうし。

「じゃあ、今日の夜の事、ちょっと覚えておいて」

「うん」

そんな会話をして、僕らはめいめい、部屋に戻つたり居間に行つたり。いつも通りに自由にし始めた。



「嫌だつていつてるでしょ！」

こんなちつちやな体で、大人の男相手に勝てる訳はないのに、私は自由の利く片手を振りまわしていた。それだつて直ぐに掴まれて、ずるずると路地裏を引きずられてしまつただけれど。

「いけません。ミス・乃選」

片手のノートパソコン。これさえなければ、私は追わることなんて、囚われ同然の生活なんてしなくて済んだかもしないのに。でもこの手がないと、今の私はない。

「嫌！ 放して……放しなさい！」

叫んでも聞いてくれる訳はなく。小さな私は、前の黒塗りの車から降りてきた男たちにとらえられそうになつた。

でも。

「やめてつて言つてんじやん？」

それは鮮やかな赤だった。そして綺麗な白。

「放してやつてよ。俺に免じてさ」

歯を見せて笑う彼だけれども、その笑顔が信じられなく極々普通で、私は恐怖と、それとよく分からぬ安心感と嬉しさを感じた。私を自由にさせてくれる人なんだと思ったから。

彼は、自分の正面にいた男を刀で一刺しにしたかと思うと、私の腕を掴んでいた男の腕を躊躇いも、突つ掛かりもなく切り落とした。それから私の腕を掴み続けている手を取つて、持主の男に放り投げた。

それから、恋人だとでも言つように私の肩を抱いて、私が逃げようとしていた路地の奥へと歩き出す。

追つてきた男の足音があつたけれども、間近で響いた銃声と男の倒れた音を残して、他はすべて消え去った。

「どうよ、俺、格好良かつた?」

あんな血なまぐさい事の後に、よくそんな事が聞けるものだとも思つたけれども、私は彼の顔を見ずに答えた。

「まあまあでや」

ヒ。

崩れてしまいそうなボロビル。けれども中に入つて見ると、新築のそれも広い贅沢な室内になつていた。そしてそこには先客が一人。

「お帰りっす……あ、すんません。俺、帰つた方いいっすか？」

雑誌をめくついていたワイシャツの彼。寝転がつたソファーの下には学ランの上着が無造作に落ちていた。そして皿につくのは、包帯や絆創膏の類。

「リスト、ちょっとこれで女物、適当に買つてきて」

「はあっ！？ ちょ、何の羞恥プレイっすか！」

「お前、羞恥プレイとか……こんな生温いプレイがあつてたまるか！」

論点はそこなのでしょうか。

「あ。私の事でしたらおかまいなく」

と、私が手を振ると、私を助けてくれた方ではなく、寝転がつて

いる方の人が私を指さした。

「でも、それは不味いっすよ。返り血とかべったりっすよ

「白い服だつただけに目立つしな。……つか、パソコンにもかかってんだけど、大丈夫なのか」

「え？ あ！」

「私の服と同じく白のノートパソコンに、血がかかっていた。けれど、焦つた割には、本当にかかってしまっていただけで、中に侵入してしまった形跡はない。

「ま、いいか。とりあえず風呂入つてこいよ。向こうのドアから出て、一番奥。タオルとか後でおいといてやるから。着替え……俺のかしてやるよ。下着は……悪いけど、こいつと買いに行つてくれ」

「ええ！？ やつば俺なんすか？」

「余つた金、お前にやるから」

「うう。結構な金額だ。紙の輪つかで止めるほどじの厚や。

「買つもんメモしてやるから」

そうしてお風呂場に追いやられた私は、気まずく思いながらもいそいそと服を脱ぐ。清潔感のある真っ白な場所。そう思った。脱衣所も、浴槽の方も。広いし、綺麗で。

最初からそうしてあつたよつこ、暖かそうな湯船。

「あ

私の目に留まったのは、何種類も専用のラックに収めてあつたシャンプーやリンスの数々だつた。まるでワインのボトルを飾つてゐるよつにも思える。その中には、私が使ってみたいと思つていたトリートメントもあつて、迷わずにそれを手に取る。

何日も何日も逃げていたから、ボサボサになつていた髪をぬらして、シャンプーで泡立てる。洗い流した後に綺麗な青のボトルを手にとつて、蓋を開ける。中身も綺麗な青色だつた。

それを髪になじませるよつにしていた時だつた。

「バスタオルとか、戸のすぐ前におことくから

「は、はいー

軽い調子でまた出て行つてしまつた彼。そしてすぐに、笑い声やら叫び声が聞こえてきた。楽しそうだ。

それからトリートメントを洗い流して、洗顔と体も洗う。ボディーソープも何個も種類があった。どうしてこんなに並べてあるのかが疑問ではあつたけれども、これはこれで、毎日選ぶのが楽しそうだ。

シャワーを浴びてから、ゆっくり湯船につかる。こんなにリラックスしたのはいつぶりかな、とか考えていたら、こきなり声が。

『あ、湯加減、どう?』

「きやあつ!」

バシャッとお湯が散った音が聞こえたのか、向こうから笑い声が。

『悪い、悪い。大丈夫見えてはないから。そういう機能付きなんだよ。それで、どう温くないか? 温いなら脇のパネルで調節してくれよ。後、湯船の足側。ボタンあるだろ? それ押したらチップせえけどテレビ出てくるから。チャンネルは……まあ、やってみればいい。わからなかつたら聞いて。赤いスイッチでこっちと話ができるか

『ら

…お風呂にこんなにこだわる人もいないような。

結局今回はテレビも赤いスイッチも押さずに、入浴を終えた。バスタオルはフワフワしていたし、彼のものだというワイシャツもズ

ボンも、一点のシミもない。本当に清潔な人だ。

やうして上がって見ると、すっかり出かける風の、学ランの彼。

「もひチョイ待てって。髪乾かすぞ~」

まさかここまでしてくれるとは思つていなかつた。白い髪の彼は、私を丸椅子に座らせて、近くにあつたコンセントから電気をひっぱつて、ドライヤーをつけた。なびく自分の髪がわらわらとしていて、軽く感動を覚える。

「あの、本当、すみません」

「いやいや。半ば強制的に誘拐してきたようなもんだしな」

笑顔で楽しそうにしながらも、彼はいう。けれども、私は正直、とてもうれしかつたのだ。私は、今までの自分の人生がいやだつたから。

私の髪が渴いて、上着を受け取つたとき、白髪の彼は学ランの青年に、わらにわらひと束お金を渡した。それと、メモ。

「何とか揃つだろ」

「つすね」

そんな会話をしている一人を見ると、学ランの彼に手を掴まれた。

「あ、まちがってますよー。」

どこに行くのか、よく分からなかつたのだけれど。

「好きなだけ買つてくださいって、名鷹さんが

彼に連れられてきたのは、デパート。しかもかなり大きな。そしてそこにある洋服屋。かわいい服がたくさん並んでいる。

「え、そんな……悪いですよ」

遠慮する私に、彼は首をひねつて、すぐそこにあった服を手に取つた。

「これなんてどうすか?」

私の遠慮を、全く聞いていなかつた様子の彼。

「名鷹さんがいいつつたんすから、いいんすよ。あーゆーんなん  
つすから」

うんうん、とうなづく彼。だけれども、私には服の選び方が分からなかつた。誰かが用意した服しか着たことがなかつたから。

そしてそんな私に、どんどんと服を見つめつけて持ってくる彼。  
そして結果的に。

「これ、全部下さります」

私ではなくて、彼が頼んでしまったりして。

そんなことをしながら、二店舗まわって、靴を見て、アクセサリーを見て。

「あの、ここまで渡すんで、俺はここで待ってるんで……どうぞー。」

最終的にたどり着いたのが、ランジHリー店。さすがに男の子は入れないだろう。ドキドキしながら入って見ると、すぐに店員さんに声をかけてもらえたおかげで、思つより早く買い物を済ませることができた。荷物が多いな。そんな事を思つていたのもつかの間。全て彼が持つてくれた。

そう言えど。

「あの、お前は……」

今更。遅すぎるけれども。

「俺すか？ 俺は莉菅原 遠夜。 名鷹さんにはリストって呼ばれてるつすね」

「ナタカ？」

「白い髪のお兄さんつすよ。春田野 名鷹。赤い死神とかなんとかつて言われてるんす」

赤い死神。ネットの掲示板で見たことがある。都市伝説。でも、私が会った時の彼は、確かに赤かつた。

「死神の割に、いい人つすよ。頭いいし」

よいしょ、と荷物を持ち直した彼は、もう一つ上の階。生活のフロア、と書かれた階で降りて、そしてベッドコーナーへ。

「で、これで今日のところは最後なんすけども……どれがお好みで？」

「え？」

「名鷹さんが。女の子路上にまつぽりだせないから。むじろ家で暮らすためにって。ベッド。」

「ええ！？」

「俺はっすねえ、こんなお姫様チックなのが似合つと思つさうけ  
ど……」「

やつぱり私の話なんて聞いてない。そして結局彼が勧めるまま、  
そのベッドを購入して、なおかつそれとともに、名鷹さんの家に帰  
りついてしまったわけで。

「お前のセンスは最高だ！」

「あざーっす！」

見事にコーディネートされた部屋。全ては遠夜さんのアイディアとふたりの腕力。

「三日以内に本棚とかいろいろそろえてやるから。欲しいもんあつたら言つて。ああ、人形とかそういうのもいいし」

豪遊する人だな。と、思つていたら、インターフォンがなつた。けれども鳴つただけであつて、その人は呼びにかなくとも、勝手にここまで入つてきた。片手に小さな紙袋を持つたその人は、黒い長いストレートの髪をして、柔軟にほほ笑んでいる。三十代ごろの、でも綺麗な人だ。

「毎度どうも。携帯ですよ～」

それは私に渡されて。

「オプション、沢山つけておきましたからね。うふふ、沢山使ってください。ああ、その坊やに任せれば、一番いいかもしませんね」

「あんがとね

くすくす笑うその人に、名鷺さんが言つ。言われた彼はさらに笑みを深くして、頭を下げた。

「お礼を言つのはこひらの方ですよ。あなたのおかげで、私は大儲け。命の危険もないのですから。その感謝がお金で伝わるなら、幾りでもお出ししますよ」

「うか。あのお金の出所は彼なんだろう。

「……あの人アングラの人つすから」

「ひつと教えてくれた遠夜さんに小さくうなづいて、私は彼に小袋を渡す。一瞬きょとんとされたけれども、すぐに思い当たつたのか、中身を確認して言つた。

「あ、明日でいいですか。今日はもう帰らないと

それを聞いた瞬間、今度は私がキヨトンとした。

「あ、ここには家があるんだよ。暇だから遊びに来てるようなもんで」

「そうなんですか」

「そうなんすよ」

意外だった。私がこうだからといって、相手がそうだとは限らないのだけれど、純粹に以外だと思つてしまつた。それはたぶん、彼の包帯のせいでもあるんだろうけれども。

「あ、そうでしたそうでした！」

と、黒い髪の人に続いて、家から出よつとした彼が、玄関先で振り返つた。

「名前、聞いてないつす

すると、名鷹さんも私を見て、ああそうだった、とつなずく。私も聞いておいて名乗つてなかつた。

「私は、乃選のえるです」

「曲字はな？」

「……乃選だけなんですけれど」

「へえ。ノエルね」

それ以上聞かない。聞かれても、本当に乃選でしかないから、答えられなかつたんだけれども。

「つか。じゃ、また明日、乃選

手を挙げて出て行つた彼。その背中に、私の横で名鷹さんが言つた。

「また明日つて……ノエルにしか言つていかなかつたよな、今」

「そうですね」

小さく笑いながら返して。そう、これが私があこがれていた生活の始まりでした。



## 04・死神掲示板

夜に人がくる、と言われて、正直、いい気分じゃなかつた。けれども、来た人があたしの興味を引いて引いて仕方がない。

「……」

「いいのか、鳶」

「僕は構いませんよ。同じ家にいる時点で、危険は僕とおなじですから」

あたしとヌイの前に座っている人たち。エンの両隣。笑顔で口タをなでている、首にバンドを巻いた可愛い感じの人と、長身で細いカツコいい感じの人。

「……」

「ああ、そなんですか」

「護衛のようなものだ。君たちの暮らしに介入するつもりはないが

苦笑しながらヌイが言つ。あたし的には、どうして鳶くんが護衛されているかの方が気になる。話してくれないだらうか。

かといって、自分から聞く勇気はない。

「自己紹介がまだだつたか……俺は百合萩 誇彦。」かたおか ゆりおぎ じょうげん。「……」  
翼つばさ  
「」

翼といつりしい首バンドの人が笑顔で頭を下げる。けれども言葉がない。

そしたら、オズオズとした様子で、ヌイが誇彦さんに言った。

「あの、もしかして、片岡さんって……声、出ない人なんですか？」

それを聞かれた瞬間の一方の反応は迅速かつ後ろめたさのないものだった。

「その通りだ。だから、ほとんどの場合は俺といつがペアになっている」

そうして笑顔で大きくうなづいている翼さん。不思議な感じだ。声が出ないというだけの事が、とても不思議に思えた。なぜだか、彼は耳も聞こえないんじゃなかろうか、とか、目が見えないのでなかろうかと考えてしまつ。

「この人達に守つてもらわないと、どうやら僕はとても危険な目に

あつらしこんだ

自身では信じていないようなうすら笑いを浮かべてこのHン。それとも余裕なんだろうか。

「俺たちが守っているところでも限界がある。どちらにしろ危険といつにには変わりはない」

「俺たちが守っているところでも限界がある。どちらにしろ危険といつにには変わりはない」

「俺たちが守っているところでも限界がある。どちらにしろ危険といつにには変わりはない」

「俺たちが守っているところでも限界がある。どちらにしろ危険といつにには変わりはない」

「…………どうして、危険なんですか？」

その瞬間、平静を装いながらも、私は誇彦さんを見て、そしてHンを見た。一人とも、表情を崩すようなことはない。ただ、翼さんだけが、首をひねって苦笑している。そして誇彦さんに向かって、何かを話したようだつたけれども、口をパクパクとさせていたのを見ただけなので、何と言ったのか分からなかつた。

けれども、そんなあたしに気がついたのか、エンが肩をすくめて

教えてくれた。

「『ど』から話していくのか迷ひみねつてこつ話をじてるんだよ」

「鶯ぐん、今の見ただけで分かったの？」

「まあ。三か月くらいの付合だし……」

しまつたとこつよつて、とりあえず笑みを浮かべた風のエンをはさんで、誇彦さんと翼さんが頷いたのが見えた。

「……赤コートの死神を知つてゐるか？ 有名がどつかは分からないが、都市伝説だ」

「知つてます」

「噂で聞く程度には……」

即答したあたしと違つて、ヌイは自信なさうに視線をそ迷わせる。

赤コートの死神。丁度三か月ほど前から有名になつてきただの都市伝説だ。白髪の赤いコートを着た死神が、ジャック・ザ・リッパーの「」とき早業で、裏路地に人を引きづり込んで殺してしまつたというような話。普通なら都市伝説で終わらせてしまつたところだが、彼は都市伝説ではない。

現実に存在しているのだ。いづなれは都市伝説のオリジナル。

「彼は、その死神に目をつけられている。今もそうだが、もしアレが鳶を殺した場合、たぶん始まるのは無差別な虐殺だ」

「……今も結構好き勝手やつてるみたいだけどね」

鼻で笑うようにして、今は何も映っていないテレビ画面を見つめる鳶。そういうえば、ずっとニュースを見ていた気がする。刺殺体と銃殺体が発見され、重傷者が病院に搬送されたやらなんやら。行方不明の少女の安否とも言つていた気がする。

「え、それって、鳶くんが

「そうだね。僕がストップバーってとこかな。そう、ゲームの賞金みたいな」

「なんで……」

そんな事に。あたしが一番知りたいこと。教えてほしいこと。だけれど。

「まあ、それはおじおいね」

いい具合にはぐらかされてしまった。彼はどうしても話す気はないようだ。だったら無理に追及はしないけれども。好奇心が疼くうちに聞かせてほしいものだ。

けれども、それについてはあたしも情報を持っている。彼、赤いコードの死神が、どんな規則を持つて行動しているのか。ネットの噂と、サイトの状態と、新聞の事実で。話しておいた方がいいんだろ？と思つたけれども、どうもきつかけがつかめない。

「……ミオ、話したいことあるんだ？」

そう言つたのはエン。だけれども、その視線はあたし自身ではなく、少しばかり上方に向いている。肩の上のあたり。何かいるんだろ？と振り返つてみても、誰かがいるはずもなく、あたしは曖昧に笑い、その場全員の視線を受ける。

「あ、知ってるかもしれないけど」

そう切り出して、携帯のブックマークから、あるサイトを呼び出す。

「噂つていうか、本当のことなんだと思うんだけど……」のサイトの、ちょっと奥行つた、バス制の隠し掲示板にね……」じつじつ、殺人依頼板があるんだけれど、ほら

指をさした、教えたいた板の名前は『レッドファイフティー』。

「赤……15？」

首を捻ったヌイ。少々目を細めて何もコメントしない翼さんと誇彦さん。そこでやつぱりエングだけが。

「赤い死神ってどこかな。ああ、なんか、分かったよ。うん。……書き込み通りに死ぬんだ」

「うん。そう」

発想力がすごいのか、そもそも知っていたのか。知つていて知らないふりをする必要もないだろうけれども。中央の決定ボタンを押して中に入つてみる。

「字だけだと、いまいち分かんないけれど……」

「確かに死んでるな。中には書かれてない人間もいるようだが」

そのU.R.Lを教えてくれないかと言われた私は、赤外線通信で誇彦さんの携帯にメールを送る。真っ黒の携帯だった。似合つ。

「あとで、お前にも送つておくれ」

「……」

笑顔でうなずいた翼さん。笑顔の似合つ人だと思ったけれども、あたしはさつき見た。掲示板の中身を見ているときの、笑顔じゃない翼さん。いうなれば、仕事のスイッチが入つていてる翼さんというべきか。

「……まあ、とこう訳で、僕にあんまり係ると、いろいろ面倒がかかる」

「同じ家にいる時点では、もつれただと思つ」

「他を巻き込むのがいやなら、最初からここに来なければいいの。」  
そう語つた。

「だつて、一人でいると、僕はいろいろ……世間的にダメ人間になつ

「ちやうから」

肩をすくめて笑顔で言つ彼。

「常識のある普通の人の近くにいないと

なぜだろ？ その言葉がひどく胸にさわった。

普通は、つまらない。



それは学校生活が始まってから、一週間かそこらした頃だつたろう。授業が終わつた直後、掃除の時間に入つてから、それは始まつた。鳶は、自分がここに来てから、たぶん、来る前から続いていたのを知つていたが、実際に目にはしていなかつたので、どんな行動も起こしてこなかつた。

現在同居している、ルームメイトの一人、代四富 犬居は、俗にいういじめられっ子だつた。

今日もクラスの男子生徒に、教室の掃除を押し付けられていた。

「……犬居くん、手伝つよ」

鞄を持って帰りかけていた鳶は、掃除ロッカーから箒を取り出している犬居に声をかける。ビクリと震えた背中に、鳶は眉をひそめる。

「犬居くん。僕は別に、何もしないよ。君、今、どうせ裏切られるとか思つてるんだろ」

「あ……違つよ。…違つ

「どうかな。ここでこんな事になつてゐるつていうのは、ずっと昔から、あの人たちとはあんな関係だつたつてことじやない？ まあ、

精神的に全く成長しない人間もいるから、一概にそうとは言えないけれど、もう僕らは高校の三年だ。誰かをいじめるだなんて、新しく始めるような歳じゃない」

箋を握りしめている犬居の横から手をのばして、自分も箋を持ちながら、鳶は淡々と語る。その表情は、いつもの様な笑顔ではなく、怖いくらいの無表情だつた。怒っているようにも、見えなくない。そう、初めて教室に入ってきたときのような、どの自分も曝け出しているいよいよ、ありのままの飾らない自分の表情。

少し力強くロッカーの扉を閉めた鳶は、軽く犬居の肩を叩いた。

「僕はね、犬居くん。はつきりと助けを求める人は助けない主義なんだ」

それは、はつきりとした宣言。突き放すわけではないが、手を差し出すなんてもつての他。自分から求めない人間には何も与えない。自分が求めるものは必ず手に入れる。それが、どんなものであっても。どんな手を使っても。

求められたなら、与える。求めたなら、与えられる。求められないなら、与えない。求めなければ、与えられない。

「キリストの教えにあるんだよ。じついの。……僕は、キリスト、信じないけどね」

そうほほ笑んだ彼。犬居は不安そうな瞳のまま、教室の端から第  
かけを始めた鳶を見る。昨日の事といい、先ほどの事といい、彼は  
たぶん、普通じやない。気が狂っていると言つている訳ではない。  
ただ、凡人とはきっと違つ。頭の中。思想。その他。

少しだけ、うらやましいと思ひながらも、心のどこかではおびえ  
ていた。彼は強い。自分は弱い。自分は彼に、意図も簡単に負けて  
しまうだろう。そして、今と同じように、嫌な事を押し付けたり、  
苛立ちを発散せん的になる。

「やられたらやられっぱなしは、どうかと思つた。諦めるのは良く  
ない」

教室の前方から、少し大きめの声で言われ、犬居はまた肩を震  
わせる。掃除ロッカーの前から動かない今まで。

「自分が弱いと思うなら強くなればいい。それでも弱いんだから仕  
方がないって逃げるのは、こうして生きている上では通らない言い  
訳だ。本当に逃れたいなら逃れられるはずだよ。でも出来ないのは、  
君が諦めてるからだ。ただ我慢していればいいだなんて思つちゃつ  
てるからだよ。僕には分かる」

僕には分かる。絶対的に信用できない言葉だが、どうしてだろう  
か。鳶に言わると、そう思えてしまつ。

恐る恐る振り向くと、彼は、箒をかける動作をやめて、ゆっくりとしかし確実に、犬居の目を見た。じつと。頭の中まで見るかのように、少しの迷いもなく、真っ直ぐに。

「僕も、似たような状況だ。ただ、君は諦めても我慢すればすむ。でも僕は、諦めたら我慢する暇もなく死んでしまう。だから僕は強くなるし、死ぬ氣で逃げる。それが、立ち向かって戦う」

「鳶くん…」

明らかに犬居とはスケールの違つ話ではあったが、その言葉は確かに心に響いた。どこかで何かを感じたのは分かる。そして、嬉しい。

「助けてほしくなつたら言つてよ。たぶん、僕は助けられるから」

「……」めんね

「別に」

先ほどよりも直接的に、言われ、犬居は謝罪の言葉しか出でこなかつた。知らない場所にきて、不安なのは彼の方であるはずなのに、その彼に、自分が気遣われている。それが、済まなく思えてならない。

けれども彼は、鳶という少年は、あれほど犬居の心情を口にして

いたところに、そっけなく一言を返しただけ。

「片付けようか。ごみ箱、そんなにごみ入ってないし。今日はいいんじやないか」

いつの間にか、チリトリを片手にごみ箱の前に立っていた鳶は、蓋を閉めて、ロッカーを開ける。それから、元あつた場所に、チリトリを戻して、ついでに犬居の簾も受け取って、自分のものとまとめてロッカーに突っ込む。明日開けた瞬間に倒れてきそうだったが、鳶はお構いなしに扉を閉めた。

それから、例の笑顔で。

「帰るうか」

と、一言、言ったのだった。

その次の日だ。週代わりの掃除当番。昨日犬居に掃除を押し付けた男子生徒が、掃除ロッカーを開けた。瞬間、箒が倒れかかり、思いきり彼の頭を打つた。よく彼と一緒にいる男子生徒達が、何やら犬居に話しかけていた。

それを横目で見ながら、鳶は小さくため息をついて、本を片手に教室から出る。図書室に本を返しに行くためだ。その時、犬居の前を通ったが、彼は鳶を見上げることも、声をかけることもなく、ただじっと席に座っていた。その時点で、何かがおかしいと思ったが、鳶は何もしない。

「……忍耐力あるなあ」

鳶が持っていた本は全部で三冊。『裁縫の心得』和服編』と『快樂殺人の心理学』、それと『すぐに役立つ護身術』。

校舎と校舎の間にある、湿った暗がり。そこは誰も通りないし、校舎側からも、窓がないので見えない、いわば視覚。

「昨日の掃除、お前だつたよな？ あれ、なに

「あ、あれは……」

あれは、昨日掃除ロッカーに掃除道具をしまった時、たまたま…たまたまそなつてしまつただけ。故意にではないし、そもそも犬居自身が自分でしまつたわけでもない。

けれども、彼はこういう場面において、怖気づいてしまう。言いたい事を、言わなくてはいけない事を、口にすることが出来ない。

「調子乗つてんじゃねえの？ 編入してきたやつ……斜透字だかつてのとつるんでるじやん。」

がし、と襟を掴まれて、犬居は相手を見上げて硬直したのだが。

「僕と仲良くしゃいけないとか……君に決める権利はない」

その彼の首根っこを、件の鳶が掴んでいた。一斉にその場にいた全員がそちらに顔を向ける。

「教室に犬居くんの鞄あつたから……それに下駄箱、内履き置いてあつたし。」<sup>よし</sup>いうことする場所つて、大体は、ひと目につかないところだよね。入学するときに学校の周囲も一周させてもらつて、適した場所は三か所あつたけど……まさか、一発で当てるとは思つてなかつた」

大丈夫、犬居くん。そう微笑んだ鳶に犬居が頷くのと同時に、彼を掴んでいた手の力が緩む。

「慶永くん……だつたつけ？ 君が行つてるロッカー、やつたの僕だよ。しかもちゃんと頭に当たるように、一本目が避けられても当たるように時間差つけてたんだ。まさか一本とも当たるなんて思いもしなかつたよ」

ぐすくすと小さく笑いながら、犬居が解放されたのを見るなり、鳶は慶永の首から手を離す。

「転校生……お前もちよつと、調子乗つてんじやないか？」

「編入生だよ。僕は調子乗つてない。」この程度で調子に乗つてるといわれてしまつたら、警察の人たちだつて調子に乗つてることにな

る。悪い人からいい人を助けるのは当たり前のことだよ？ ともすれば、調子に乗ってるるのは君たちの方だ」

高校生にもなつて…とつぶやいた鳶を、慶永らが囮むようにする。囮むといっても、逃げ場がないわけではない。ただ、犬居のいる方向には行き辛い形にはなつているが。

立ち上がった犬居。しかし、彼は鳶を助けることが出来ない。膝が笑つてしまつ。どうしても、怖いという感情がぬぐえない。それは、きっと、小学校からのトラウマ。体がそう覚えてしまつたのだらう。

そんな犬居の心中を察してか、鳶は殊更、柔らかな笑みを彼に向け、余裕をアピールする。

「へらへら笑つてんなよ。女みてえな顔しやがつて」

慶永ではない、他の男子、蓮田<sup>はすだ</sup>が鼻で笑つてみせる。が、鳶はそれを否定せずに、逆に肯定して見せた。

「そうでしょ？ 僕が綺麗過ぎるから、死神に付きまとわれてるんだ」

「冗談めかして顔に手を添える鳶だったが、事実なだけに、犬居は笑えない。

逆に大声で笑つた慶永や蓮田達は、笑いやむと同時に、実力行使に出た。一人目が拳を鳶に叩きつけようとした瞬間、彼の眼が温度を失う。瞬間、その拳が止まる。

何がどうなつたのか。そう、鳶の足が、彼の鳩尾に入つていた。

「相手が次にどうでるかとか考えないから、そんな無防備になるんだ。自分が優位だと思わないことだね。常に有利得ない場合も想定して行かないと」

と、犬居を手招きで呼んだ鳶。犬居はおびえながらも、足早に鳶のもとへ行き、情けないがその背に隠れた。鳶は苦笑したようだが、そうでなかつたら、そもそもいじめられて等いないだろう。

「くるなら、まあ……どうぞ？」

言いながらも、犬居は鳶に背を押されて、校舎内へと戻るようになされかれる。その時、鳶自身も彼らに背を向ける形になる事に、犬居は恐れを感じた。彼らは背後から狙うこととは厭わない。けれども鳶はいいと言つ。

そして案の定、湿つた砂利を踏みしめる音が聞こえたのだが。

「ありえない場合も、想定しないとね」

視界の正面には、そう言って笑った鳶の顔。そして視界の端には、屋上から落ちてきたであろう、ひどく錆ついた、朽ち欠けの鉄柵。それに驚いて尻もちをついた、慶永と蓮田。

「鳶……くん」

「僕には女神がついてるんだ」

その笑顔は、本当に真っ白だった。

家に帰ついてから、犬居は口タに氣遣われ、水脈みあに掌の手当を  
してもらつていた。鳶はキッチンに立つてゐる。

「いたつー。」

「我慢しなさこよ、これくじらー」

思いのほか、消毒液がしみて、肩を跳ね上げた犬居に、水脈が眉  
をひそめる。逆に口タはフンフンと鼻を押し付けて、彼をはげます。

「ありがとう、口タ」

思わず座り込んだ時、地面に手をついてしまつたのだ。そこに運  
悪く、とがつた砂利があつたようで、帰り道、鳶に言われるまで、  
その傷には気がつかなかつたのだが、垂れるくらい血が出でていた。  
傷口は小さいが、どうやら深いらしく、手全体が痺れたかのようだ  
傷んだ。

そんな犬居に、キッチンから鳶が声をかける。

「大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫……ちょっと痛いけど」

ガーゼをテープで留めてから包帯を巻いてもらっている犬居は、どうとも言えない笑みを浮かべて返事をする。

夕飯の準備ができたようで、大皿を手に、リビングに来た鳶は、犬居の手を見る。苦笑する犬居と、相変わらず警戒しながらこちらを見ている口タ、それと救急箱をしまっている水脈。

「ハミンちゃん、包帯巻くのうまいね」

言つと、慣れてるから。といつ短い返事だけが返された。彼女も相変わらず、余り会話はしない。尋ねれば返つてくるという程度だ。鳶にしたつて、進んで話しかける方ではないので、住人が三人もいる割に、この家の会話は少ない。

けれども、仲が悪い訳ではないので、喧嘩もない。今だつて、無言ながらも、水脈も犬居も夕飯の準備を手伝ってくれている。今日の担当は鳶。結局、担当を決めて、全員でやっているようなものだ。

と、ここで初めて、犬居は鳶の左の薬指に気がついた。金色のリング。

「あれ、鳶くんって……ナリコのやつてたっけ？」

自分の席に腰掛けながら、犬居は特に何の意図もなく尋ねる。隣で水脈が、ホントだ、と言つたのを聞いた。

鳶は、ああ、と自分の薬指を見て、笑みをこぼす。

「今週の初めごろから。やっぱり初日からつけると、たぶん先生たちもつるさにだらうから。本当はつけてたかったんだけどね」

「お守りかなんか？」

そういうた類のものを常に身につけている水脈に言われ、鳶は少し迷いながらも、似たようなものだ、と答えた。けれども、指輪で、しかも薬指となると、違つ意味も出てくる。けれども、あえて言わずに、犬居は手を端に伸ばした。

「じゃあ、いただきますー！」

今日の放課後の事など、忘れてしまおう。夕食の前、犬居は常にそう思つて、そして忘れられるようになつていた。それが日課になつてしまつまう。アーッ。

「え、鳶くん」

自分の代わりに、鳶が。

犬居は、その日初めて、誰にも絡まれなかつた。けれども、後悔していた。

「ああ。ずいぶん幼稚なことするよね。彼らの精神年齢を疑つよ」

鳶は常日頃から、机の中に物は置いていかないし、ロッカーだつて使わないような物しか入れていない。いたずらをされて困るものなんて置いていないからこそ、机と椅子、その物に被害が及んだ。

「……糊とか。気付かないで座つたり、物置いたりすると思ったのかな」

鞄を窓際に置いて、鳶はせつと教室を出て、バケツと雑巾を片手に戻つてきた。バケツに入っているのはお湯だ。

「朝から掃除か？」「苦労さん」

「ヤニヤ笑いながら慶永と蓮田が見にきた。鳶は素知らぬ顔で雑巾を絞つて、言った。

「僕、潔癖症でさ。重度の。汚い所、嫌いなんだ。とても不快だ。別に、糊自体はいいんだ。だつて工場で詰められて店頭に並ぶんだから。でもこうなる工程が、吐き気がするほど汚い。僕の机に誰かが触つたつて言うのも嫌だ。この糊を買ってチユーブから絞り出したつて言つのも嫌だ。……ほんと、汚い」

君たちが。最後のは口を動かしただけ。終始、笑顔でいるのが、彼らには恐ろしく見えたのだろう。何も言い返さずに、行こうぜ、と教室からすらり出でしまった。

犬居は鳶を手伝うべきか否かを迷つて、結局手伝うこととした。

「あの、僕、触つても大丈夫？」

「ああ、いいよ。犬居くんは、その他大勢じゃなくて、友達だから」

「？……そ、そ、うなんだ。何か、嬉しいな！」

安心した様子で、机を拭きだした犬居に、鳶は小さく笑みをこぼした。

彼は本当に疑うこと知らない。自分一人で不安になつたり、がまんしたり。誰かのせいにするということを知らない人間だ。ここまで白い人間と出会つたのは初めてで、何だか絶対の信頼を置きたくなる。こんな気持ちは初めてだつた。

「ここまで拭けば大丈夫だと思う。さすがに机の裏とか中とまでは、糊、塗つていみたいみたいだから」

「この糊、どれくらいしたんだろうね」

「さあ。でも結構無駄遣いしたんじゃないかなあ」

別についていく必要はないのだが、犬居はバケツを片手に廊下に出た鳶について行つた。チャイムがもう直ぐなるが、一人で教室に戻るより、二人で教室に戻つたときの方が、先生に対する言い訳のしようがある様な気がした。それに、一人で教室にいるよりも、鳶と話している方が、当たり前だが断然楽しいから。

そして思ったとおり、犬居と鳶、一人で教室に戻つたとき、担任は何も言わずに、ただ席に戻る事をせかしただけだった。バケツをロッカーに放つた鳶を、少し注意した程度で。鳶も犬居も、小さく笑つて席に着く。

ただ、慶永と蓮田が、面白くなさそうな顔をして、互いにうなづきあつたのだけが、気になつた。

授業が始まつて、終わつて。一回目の休み時間は何もなかつた。それを三回と、四時限目までは、何事もなく終わつたのだが。

昼休みに入つて、昼食を取り終わつた後だ。

鳶はいつものように席に座つて、退屈そうに本を読んでいた。犬居も、自分の席で、今日出された宿題を片付けていた。

「斜透字」

そう声をかけてきたのは、慶永。鳶は視線だけを彼に向けて、それだけでまた本に視線を戻す。返事も何もしない。甚だしいほどの無視だった。

馬鹿にしているとしか思えない鳶の行動に、慶永の顔色が、みる赤くなる。顔には怒りを「こ」まかすためか、笑みが張り付いていた。それでも鳶は何の行動にも出ない。変わらずに本を読み、ページをめくつて、視線で字を追つてゆくだけ。

「斜透字！」

「パン！」と机をたたかれ、漸く顔を上げた鳶だったが、慶永を見ているのは彼だけではない。犬居は当然のこと、教室に残っていたクラスメイトも驚いて、そちらを見る。一気に教室の温度が低くなり、そして静まり返る。

無言の鳶。見透かすよつな目で相手を見上げて、観察し、そして次の行動を読む。性格や気性、今までの行動などから、大体の予想はできた。

「僕に何の用。僕、本読んでるんだけど」

「あつそつ」

と、言つなり、いきなり鳶の襟首を掴む。

行動するよりも、口で言えよ。鳶はそう思ひながらも相手を睨む。同時に、慶永の向こう側、後ろの方の扉から、教室に戻ってきた蓮田の姿が見えた。

セヒで鳶は眉を寄せた。面倒くせることになつた。

「マジで、お前ひどい」

「僕の事気にするからだよ。空氣だと思つて」

「それがウザい。何様？ もつもつとそれとも、考えた方いいんじやね？ お前、後から来た奴じやん」

「来たくて来た訳じやない」

ぐ、と自分を掴む慶永の腕を掴んだ鳶。その左手に光る指輪を見て、蓮田が横から口を出した。

「は？ 何それ。ここガッコだぜ？ そゆの校則違反じゃねえの」

「やうだけど？ あんたらには関係ない」

怒った。大居は席から立ち上がる。今、鳶は明らかに苛立つていた。だって昨日、自分がその指輪について尋ねた時は、そんな風な反応はしていなかった。

それに、あの指輪は、彼にとっては大切なもののらしい。

「校則違反知つてつてやるのつて最悪～」

そう言つた蓮田を鳶が今までにない表情で睨みつけた瞬間。

「没收！」

11

慶永が素早く鳶の指」と引つゝ抜く様に、金のリングを指から抜き去つた。しまつた、と思つてももう遅い。そしてそれを見ていた犬居は、息をとめた。早く返してやつてくれ。そう思つた。

「返せ！」

慶永に掴みかかった鳶だが、それよりも速く慶永は指輪を蓮田に投げる。そして受け取った蓮田はそれを持つて教室を走り回り、鳶に追いつかれそうになつたら慶永に渡す。

しかし、薫は見た目ほど体力がない訳ではないし、頭の回転だって速い。だから、確実に慶永と蓮田の動きをとらえ、そして先回りし始める。

そして、慶永にリングが渡った瞬間、鳶の手が、慶永の肩を掴んだ。そして掴まれた慶永は、驚きと意地のあまり、やつてはいけないことを、やつてしまつた。

「へへー。」

慶永は渾身の力で放り投げた。金の指輪を、窓の外へ向かつて。

「ハハー。」

そう叫んだ鳶。そして教室にいた誰もが、それを見た。慶永を突き飛ばし、一直線に窓に走つて、そして窓枠に上がつたと同時にそこを蹴つて、窓の外へと飛び出した彼を。

「は、二階。

「鳶くんー！」

叫んで窓の下を見た犬居は、驚くと同時に息をつく。

そこには立ち上がつた鳶の姿と、彼の下敷きになつてやつたのか、スーツの腰元を叩きながら、携帯で誰かと連絡を取つてゐる誇彥の姿があつた。そして、教室の扉が開かれ、ツカツカと歩いてくる人の青年。彼もスーツで、首にはバンドが巻いてある。

「翼、さん。……あの、どうして」

教室を見渡して、それから窓の外を覗いて、下の誇彥にOKサインを出した翼は、つばさ学生証のサイズのパスを見せる。それはこの学校での証明書だった。

そして、口をパクパクと動かした後、気づいたのか、携帯をいじり始める。そして、次に犬居を指さして、携帯を指さした。

「？」

よく分からないと言つた様子の彼に、翼は困ったように苦笑して、次は口と指を合わせて、ゆっくりと言つた。『きみのけいたい』と。

それで漸く分つた犬居が携帯を見ると、丁度メールが届いたところだった。

『僕らは警察で、鳶くんは保護要因だから、学校に許可をもらつて、警護させてもらつてるんだ』

メールに書かれたことを読んだ犬居が顔をあげると、翼は笑顔で頷いて、それから自分に視線が集まっていることに気がついて、気恥かしそうに教室から逃げる。小走りで廊下の向こうへ行く足音を聞きながら、犬居ははつとして、たぶん翼と同じく下の階へと向かう。

玄関に着くと、そこには内履きの底をマットに擦りつけている、鳶の姿があった。

「鳶くん、大丈夫……？ 保健室…保健室行こう。」

「いいよ

「駄目だ、鳶。学校側には言つておく。保健室に行け。嫌なら帰れ」

「じゃあ、帰ります

「ぼ、僕も！」

「……二人分、言つておく」

そして授業が始まるまで保健室にいた二人は、翼に荷物を持つてきてもらつて、授業が始まつてしまらしくしてから帰つた。後日、学校に来てみても、どの教科の教師にも、何も言われなかつた。

それが逆に不安で、犬居はびくびくしていたのだが、鳶はそれを笑う。そこまで気を使ってやる必要はないんだと。



## 06・死神家のジキルとハイド（前書き）

いつもより、後半グロがあるかもしません

## 06・死神家のジキルとハイド

その少年は今日もまた、自分で自分の傷の手当をしてから、死神のもとへと向かつ。

「何やつてんだか……っすね」

鞄を背負つて、無理矢理ベッドに縛り付けてきた母親を放つておいて。

自分をも殺そうとしてくる女に向つて、それでも彼は母さんと呼ぶ。叫ぶ。ベッドに縛り付けるなんて、ひどい事をしても、彼は彼女を殺すなんてことはしない。どこかで、期待している。自分を産んで育ててくれた人が、また、家族三人でいた頃と同じように、優しくなつてくれるることを。

帰つてきたり、また、笑顔で迎えてくれることを、どこかで期待している。

「あ、おかえりなさい」

「どもっす」

勝手に上がりこんだ家のリビングには、一人の少女が。乃選のえんだつた。遠夜とおやがデコレーションをした携帯をいじって、ノートパソコンを開いて。乃選は小さく手を振る。

「あれ、名鷹さんは？」

「お仕事中ですか」

「へえ」

自分の指定席となつたソファーに寝転んだ遠夜は、学ランのボタンをはずして、ぼんやりと天井を見上げる。白い。明るい。真つ暗な自分の家とは大違つた。

「あ、あの…ココア、飲みますか？」

そういうえば、今まで一人きりになつたことなかつたな、と思いながら、遠夜はうなづく。乃選は小さく笑うと、キッチンの方へと消えてゆく。

ぼんやりとその背中を見送つた遠夜は、腕に手をやる。深く重く痛む腕は、包帯で押さえつけられている。

ここまで本気でやられたのも久しぶりで、遠夜はこの傷と同じくらいたいに、深く傷ついた。目をつむつただけで、その瞬間を思い出せる。何と言われたのかも、思い出せる。彼女が自分ではなくて、過去の人間を思い出していたのもわかる。でも、自分という、そう息子の自分を置いていけずに、結果的にこうこう行動に出たというのもわかる。だから。なお。

「もつとガキだったら、素直に殺されてやれたのに」

今更。殺されてやるなんてことはできない。痛みの中で、じわじわと死んでいく勇気は、ない。

「……遠夜さん、あの、口口ア」

「……っす」

今、聞いていたろうか。困ったような笑顔でカップを渡された遠夜は、起き上がって、それを受取る。受け取って、自分の隣に腰かけた乃選と距離をとる。

「今日は、元気ないです」

「……っすね。ちょっと、や、結構マジでへこんでるっす」

「テストの点数悪かつたですか？」

「や、そこいら辺は、名鷹さんに教えてもらつてるし、元から悪い方じゃないんで」

「なんですか？」と意外そうに首を傾げる彼女に、遠夜は軽く笑う。結構失礼な反応だよね、と思いながら。乃選は見るからに頭がよさそうだ。けれど、それを聞いた時の彼女の答えは意外だった。

「私、そういう勉強は一切してこなかったので……よく分からんんです。テストとか、試験とかは何となくわかる程度で」

「どんな生活してたんすか……」

と、ココアをすすりながら遠夜が言ったときだ。丁度、名鷹なたかが返ってきた。真っ赤なコートに、鮮やかだったであろう、赤黒いシミをこびりつかせて。リビングに入つてくるなり、彼は手に持つていた刀と、銃を床に落として、ガツクリと膝を着く。

「ちょっ！」

「名鷹さん！」

慌ててカップを放り投げて名鷹を受け止めた遠夜と、駆け寄つた乃選。大きく息をついて、名鷹は第一声にこういった。

「疲れた……」

と。見る限り外傷はないし、触つてみても変な感触はない。本当にただ疲れただけのようだったが、どうしてここまで疲れるようなことになつたのかが分からない。

「と、とつあえず、この無駄に重いコート脱いでください」

「脱がせて」

「はいー」

「……乃選、俺やるっす」

「遠夜は……俺を脱がせたいのか、この変態」

「ち、違うっす！ 断じて……こんな重いコート、乃選が持てるわけないっすから」

腕の一本一本を袖から抜いて、コートを持った遠夜。その表情が僅かに曇る。それを見ていたのは名鷹で、名鷹はそこから遠夜がコートをコート掛けに持つて行くまで、そこから腕を上に持ち上げるところまでを見ていた。

重いコートを、腕の力だけで持ち上げた時、確かに遠夜は歯を食いしばった。僅かに顎が動いたのが見えた。

「……俺も疲れたけど、どうなんだよ、リスト。お前さ、結構しんどいんじゃね？」

「何言つてゐるすか」

「じゃあ、俺のこと、引っ張り起にしてくんない？ 左の手でさ」

ん、と片手を伸ばした名鷹の手を、嫌そうにしながらも遠夜はとつて、名鷹を立たせようと腕に力を入れた。そのタイミングを見計らって、名鷹も自分の方向へと腕を引く。その時にかかつた負担。

遠夜は包帯がずれるのと、頬りなくだが塞がりかけていた腕の傷が、また引き裂かれるように開いたのを感じた。

痛くないわけがない。

「以外と、意地悪いっすね……」

「お前が強情なだけだつつの。見せてみるよ。腕。脱げ脱げ」

「変態……」

学ランを脱いで、ワイシャツの袖をめくろつとした遠夜の手が止まる。どれだけ頑張って袖を幕上げても、傷を見るには無理な体勢になる、と思つたのだろう、彼はボタンに手をかける。

「ワイシャツの下、なんも着てねえの？ チャレンジヤーだな

「……そっすか

けれども、実際は、そんなの関係なかつた。

「あの、どうしたんですか、その……」

少し顔を赤くしながらも、乃選が尋ねる。

遠夜の体には、無数の傷跡があった。新しいものも古いものも、いたるところに沢山。今は、打撲と、腕の包帯が目立つ。包帯の方は、赤いものがにじみ始めていた。

「……万能錐？　ずいぶんマニアックな感じの凶器だな。誰にやら  
れたよ」

疲れた、とあそこまでアピールしておきながら、名鷹はけりつと  
した様子で遠夜の傷の具合を見て、手当をし始める。されるがまま、  
黙っている遠夜は、溜息をついて、答える。

「母さん……っすね」

「そりゃ

いつから耐えてるのか。たぶん、小学生の時から、もう耐え始め  
ていたはずだ。自分が出来て、それから何年かした後に、両親が結  
婚して。母の方は未亡人で、父はそんな母と知り合って、結婚した。  
彼女には既に息子がいて、結婚したら、兄ができると言わってきた。

言われてきたけれど、結局、一人が結婚して、戸籍でも自分の両親となつたのに、家族となつたのに、その家族には、遠夜の兄たる人物はいなかつた。

その時は、まだ小学二年。兄はいないのか、と尋ねると、父親はそうだつたかな、と取り繕つた笑みでこたえ、母親はそこから逃げるよう、別の部屋に行つてしまつた。それから、その話には、触れないようにした。

それから三年。父親が事故で死んだ。殺されたと思つていもいいような死に方だつた。信号が青になつたから、だから、発進しただけ。それだけで、父親は命を落とした。信号無視をしたトラックに突つ込まれて。

それからだ。母親がおかしくなつたのは。

自分の知らない誰かの名前と、父親の話。それが聞こえたら、気をつけなくてはいけない。気をつけるといつても、ただ受け止めるしかできないのだが。……受け止めかれているとも、言えないけれど。

「……」

しょぼん、と落ち込んでいる様子の遠夜に、乃選はオロオロとしだす。名鷹は包帯を新しいのに替えて、専用の金具で留めてやる。

それから、遠夜が放り投げたであろうカップと、こぼれたココアを乃選と一緒に拭いて、彼に新しくココアを作つてやる。そして今

度は、乃選と遠夜、それから名鷹の三人でソファに座る。

「俺さあ、こうしてみんなの夢だったかも」

「は？」

「乃選が妹だろ、お前が弟で、俺が兄貴」

「……兄貴ですか？」

「そそ。じゃあ、俺の家族構成を暴露してやろつ。両親と兄と妹がいた！」

過去形。

「わ、私は……誰がいたか分かりません！」

不明。

「……俺は」

詰まる。

「俺は、母さんがいて、父さんはいなくて、兄さん、居たんだか居ないんだか」

そう、母親が呼ぶ名前。『徹

彼女は、自分で見て、その名前を呼ぶ。徹、と。自分がその、たぶん兄に似ているのかは全く分からぬ。けれども、彼女にとつてはそうなんだろ。同じ、息子であるんだから。

「おれ……」

なんだか、泣けてきた。

「おれ

何が言いたいんだろう。

「どうした、リス

ポンポンと撫でられて、その頭を肩に押し付けられる。名鷹は、いつたい何をしたいんだろう。

「……リスト、俺には兄貴がいたんだ。その兄貴つたら、もう、見てらんねえくれえ、まあ、おれがこんなんだからそういうのかもしんねえけど、やることなす」と、酷い奴だ。でも

と、一呼吸置いた。

「俺と妹、守るのに、親父殴つてくれたんだ。その後散々な目にあつて、どっちだつたかな、片手の、薬指か、どつか、神経切れちまつたらしいけど。でもま、そんな感じ

「……」

それから、彼は続ける。

「で、や。お袋はお袋で、俺と妹捨てて、兄貴だけ引っ張つて出て行つてしまつし……妹は妹で、親父に殺されちまつし」

向こう側で、乃選のうろたえる気配を感じた。少なからず遠夜の動搖はしている。けれども、たぶん、乃選ほどではない。彼はいま、そこまで話を真剣に受け止めてはいないから。

「だから、俺は、親父を殺した」

「……」

「そん時、兄貴が来てさ。俺のこと、警察に突き出すつもりなら、殺してやろうとかも思つてたけど……は、あの兄貴、俺のこと連れてつたんだ。そんで、自分が今から殺そうとしてる奴らんとこにつれてつたんだ。誰だつたか……俺があつたの、そつ……翼。翼兄ちやんと、あと、徹兄ちゃん」

「とおる……」

「そ、お前の兄貴」

「おれの……」

おれの、あこぎ。とおる。徹、兄ちゃん名鷹の兄が、殺そうとした。徹。……徹。

「そ……っすか」

ぽつん、と出たのはそれだけだった。そして、不思議と思つ。

そうか、兄は死んでいたのか、と。

死んでいるのは知つていた。仏壇があつて、写真があつたから。だが、何故か実感がない。どうしてか実感できない。けれども、漸く分かつた。

兄は、死んでいる。

「お、帰んの？」

「ちょっと…行つてくるだけっす

「……そ。まあ、頑張れよ」

ワイスシャツと学ランの上着を持って玄関先に向かう遠夜に、名鷹は笑いかける様に問うた。

これからどうなるのか分かっている笑みで、出でいく遠夜を見送つていた。

玄関は薄暗い。廊下も薄暗い。階段も居間もキッチンも風呂場も

トイレもビリもかしーのも。

薄暗い。だから分からない。

「……」

嫌な汗が浮かんでいる。空気が重く湿っている気がして、遠夜は浅く呼吸を繰り返す。

ある一つの部屋の前に立ち止まって、ドアノブに触れる寸前で、行動を止めている。

「やるのか……やるのか、俺。明確な理由なんて無いぞ。ただ、流されてるだけじゃないか……落ち着け、考えろ。やるのかじゃない、やれるのか。本当に、俺は……」

やれるのか。

躊躇している心。無理なんじゃないか。無理だ。

何かを探すように迷う視線と、伝つ汗。だが、一瞬感じたのは、濡れたような冷たさだった。

「大丈夫だよ……やれるよ」

思ったことを口に出す。右手がヒンヤリとした。耳の奥で水の中を泡が泳ぐ音がする。

「やれるよ……やれる」

掘んだアノブは、鉄の冷たさだが、それでも頭はすつきりした。

がちや、と開けると、ベッドの上にせ、何かが乗っている。何かが、乗っている。

田をつむつていて、微動だにしない。全く動かない。寝てるのか、死んだのか。

「まだ何もしてないよ……」

右腕を振り上げる。

「これからするんだ」

右腕を降り下ろす。

「信じたの？」

バシャン、と音がした。水面に叩き付けたような音が。けども、実際は、皮膚を裂いて内臓を断つて骨を碎いただけだ。

「信じたのに……おかしいな。信じたの、俺だけなのに」

振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて降ろして振り上げて落として。

赤かった。腹部だけがグチャグチャで、他は綺麗に残っている。腕も足も首も顔も。そう、顔も。

何と無く、母親の顔に視線を向けて見ると。

彼女は目を見開いて、遠夜を見つめたままで絶命していた。

「……あ」

田を見て、そらせなくなつて。我に返つた遠夜は、右手の物を見て、投げ捨てる。だが、それから上つてくるようじごびりついた血で、右手は真つ赤だつた。

右手の物とは、昔アウトドアで使つていた、あの赤い小さい斧の様なもの。

尻餅をついて、壁ぎわまで逃げた遠夜は、「ゴシゴシ」と右手の血を拭う。田は彼女と合つたまま。そんな訳は無いのに、自分の位置に合わせて首を巡らせている気がする。

「はあ、はあ…はあはあはあ」

血が取れない血が取れない血が取れない血が取れない血が取れない…。こっちを見ないでくれ。お願ひだから見ないでくれ。俺がやつたんじやない。俺はやれない。俺は怖かつた。俺にはやれなかつた。だけど誰かが言つたんだ。

「大丈夫だよ、やれるよ」

そう言つた奴がいるんだ。氣持悪い。ベトベトするドロドロする。吐きたい。吐き出してしまいたい。俺じやない何かが腹の中にいるんだ。飲み込んでしまった何かがいるんだ。

「う、うえ…ぐ」

涙が出てきた。自分を掴もうとする何かが、息を止めよつとする。ずつと見つめあつた母親と、田がそらせない。あの田が自分を捕えようとする。引きずりうつとする。

見たくない。行きたくない。触りたくない。

「じゃあ見なきやーー」

視界がいきなり揺らいだ。それから段々と周りが見えなくなつてゆく。目を閉じると、濡れたようなヒヤリとした感触が感じられた。熱が出たとき、「濡れたタオルを置かれるよーー」。優しく目隠しをされたよーー。

「見えないよーー、してあげる…家に帰るーー」

見えないはず。けれども遠夜は立ち上がり、ふらふらと部屋から出ていった。

そして遠夜が行方不明だとリストに載つた日。同時に彼は、殺人者として追われる身になつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6612e/>

---

絆3 ~禍束編~

2010年10月8日23時46分発行